

各関係機関団体の長
各病虫害防除員
農業資材販売等関係者 } 殿

福岡県病虫害防除所長

平成19年度病虫害発生予報第8号(11月)について

このことについて、病虫害発生予報第8号を発表したので送付します。

予報第8号

向こう1か月間の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

作物名	病虫害名	発生量 (現況)	発生量 (予想)	
		平年比	平年比	前年比
イチゴ	うどんこ病	やや少	やや少	並
	炭そ病	やや少	並	やや少
	アブラムシ類	やや多	やや多	やや多
	ハダニ類	並	並	やや少
ナス	すすかび病	やや少	やや少	やや少
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	並	並
	オオタバコガ	やや多	やや多	やや多
	ミナミキイロアザミウマ	並	やや多	並
	コナジラミ類	やや多	やや多	やや多

< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。

向こう1か月の気温は平年より高いでしょう。降水量は多く、日照時間は少ないでしょう。

週別の気温は1週目は平年より高く、2週目及び3～4週目は平年並か高いでしょう。

要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	30	50
降水量	30	30	40
日照時間	40	30	30

(福岡管区气象台 19年10月26日発表抜粋)

作物別発生予報

注：予報の根拠の末尾の（ ）書きは、（ + ）は発生を助長する要因、（ - ）は発生を抑制する要因、（ ± ）は発生の助長及び抑制に影響の少ない要因であることを示す。

【野菜】

1 イチゴうどんこ病

(1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少、前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果（ - ）

発病株率 0%（平年 1.8%、前年 0%）

発生ほ場率 0%（平年 8.6%、前年 0%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年より多い（ + ）。

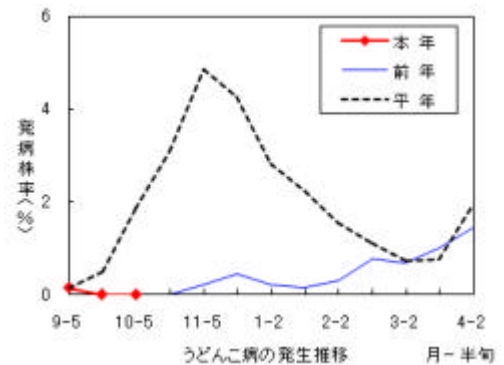
(3) 防除上の注意

ア 本病の初発生は、新しく展開した葉の裏に認められるので、上位葉裏面の病斑の有無を随時確認し早期発見に努める。

イ ビニル被覆後から年内にかけて発病に好適となる。育苗期に発生が多かったほ場は予防散布を徹底する。

ウ 下葉かぎを行い、薬液が葉裏にもかかるようにする。

エ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をロテーション散布する。



2 イチゴ炭そ病

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果（ - ）

発病株率 0.1%（平年 0.6%、前年0.4%）

発生ほ場率4.0%（平年10.4%、前年7.4%）

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年より多い（ + ）。

(3) 防除上の注意

ア ビニル被覆後のハウス内温度の上昇で潜在感染株が発病しやすくなる。また、着果負担などの株へのストレスは発病を助長する。発病株は、残さを残さずに周囲の土ごと掘り取り、焼却するかビニルで完全に包み込み、周辺株への胞子の飛散を防止する。

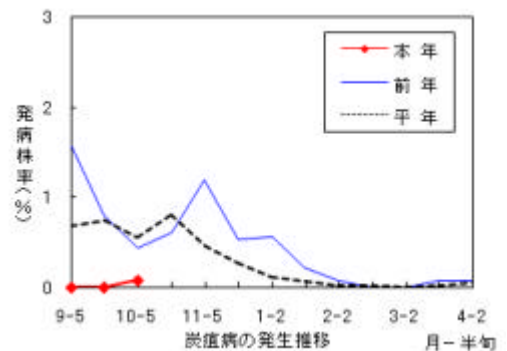
イ ほ場の排水やハウスの換気をはかり、多湿にならないようにする。

ウ 窒素質肥料を多用しない。

(4) 次作の健全親株確保に向けた対策

ア 炭そ病が発病した苗と一緒に育苗した苗は、潜在感染していることも考えられるので使用しない。

イ ビニル被覆後に定植株より発生する秋～冬ランナーから採苗し親株として育成する。



3 イチゴのアブラムシ

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果(+)

寄生株率 4.2% (平年 1.7%、前年 0.8%)

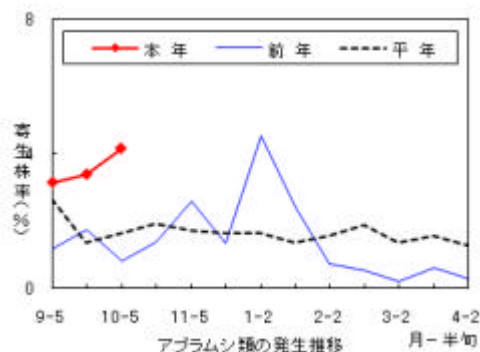
発生ほ場率42.3% (平年17.0%、前年29.6%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年より多い(±)。

(3) 防除上の注意

ア 多発生後は防除が困難となるので、発生状況に十分注意し初期防除を徹底する。

イ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



4 イチゴのハダニ類

(1) 予報の内容

発生量：平年並、前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果(±)

寄生株率 1.4% (平年 3.7%、前年 5.7%)

発生ほ場率30.8% (平年19.9%、前年48.1%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年より多い(±)。

(3) 防除上の注意

ア ビニル被覆後は降雨の影響がなくなり、乾燥すると増えやすくなるので注意する。ハダニは、はじめスポット的に発生し、地面に接した下位葉ほど寄生が多い。多発生後は防除が困難となるので、葉かぎ等の管理作業時によく観察し、発生がみられたら早めに防除を行う。

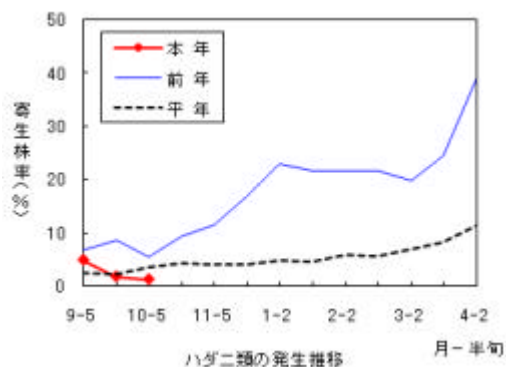
イ 防除は摘葉後に行うと効果的である。その際、葉裏に薬剤が十分にかかるようにする。

ウ イチゴ以外の植物にも寄生するので、ほ場内や周辺の除草を徹底する。

エ ハダニ類が寄生した摘葉や除草した雑草は、ほ場内に放置せず、ビニル袋に入れ密閉して処分する。

オ チリカブリダニ等の天敵を利用する場合は、天敵に対して影響の少ない殺ダニ剤を散布し、ハダニ類の密度を下げてから行う。

カ 薬剤によってはミツバチへの影響があるので、薬剤の選定は注意する。



5 ナスすすかび病

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや少

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果(-)

発病株率 0% (平年 0.8%、前年 0.3%)

発生ほ場率 0% (平年 10.8%、前年 11.1%)

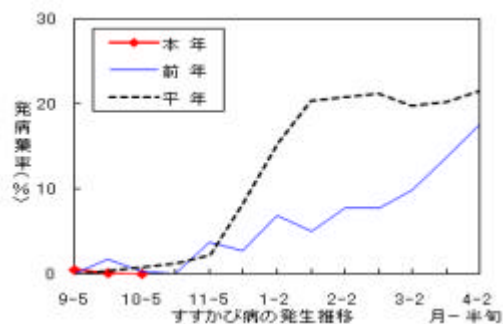
イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年より多い(+)

(3) 防除上の注意

ア 病勢が進展してからでは防除が困難であるため、発病初期のうちに防除を徹底する。

イ 発病葉はできるだけ除去し、ほ場外に持ち出し処分する。

ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



6 ハスモンヨトウ（野菜共通）

（1）予報の内容

発生量：平年・前年並

（2）予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果（±）

イチゴ寄生株率 1.8%（平年 1.6%、前年 1.0%）

発生ほ場率 30.8%（平年31.2%、前年37.0%）

キャベツ寄生株率 1.5%（平年 2.0%、前年 0.9%）

発生ほ場率45.5%（平年25.1%、前年18.2%）

レタス寄生株率（ヨトウムシ類） 2.3%（平年 0.9%、前年 1.2%）

発生ほ場率（ヨトウムシ類）25.0%（平年24.0%、前年40.0%）

イ 10月5半旬（10/21～25の5日間）のフェロモントラップの誘殺数（-）

筑紫野市 101頭（平年比 42.9%）

筑後市 125頭（平年比 69.4%）

行橋市 246頭（平年比 79.3%）

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年より多い（±）。

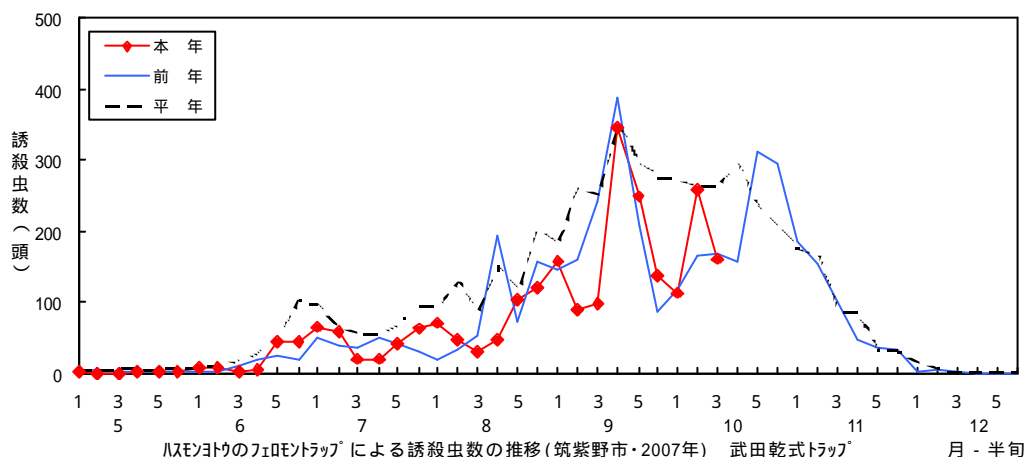
（3）防除上の注意

ア 孵化直後から3齢幼虫期までに薬剤防除を徹底する。

イ 若齢幼虫は群生しており、カスリ状の葉をみつけたら直ちに除去する。

ウ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため、4mm目合い以下の防虫ネットを隙間なく張る。

エ 今後の発生状況については、病害虫防除所のホームページを参照する。



7 オオタバコガ（野菜共通）

（1）予報の内容

発生量：平年・前年やや多

（2）予報の根拠

ア 10月5半旬調査の結果（+）

イチゴ寄生株率 0.7%（平年 0.5%、前年 0.3%）

発生ほ場率 23.1%（平年17.8%、前年29.6%）

キャベツ寄生株率 3.6%（平年 3.0%、前年 3.8%）

発生ほ場率54.5%（平年52.6%、前年81.8%）

レタス寄生株率 2.8%（平年 1.6%、前年 0.4%）

発生ほ場率 50.0%（平年20.0%、前年20.0%）

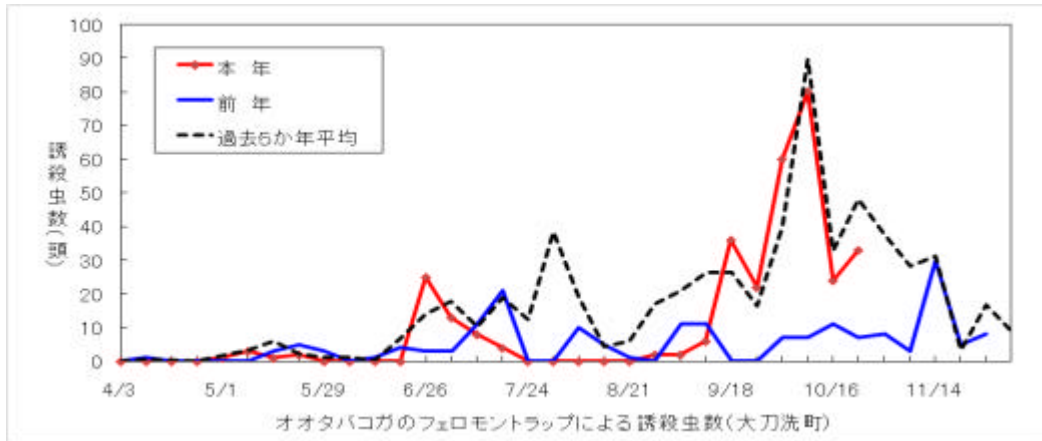
イ フェロモントラップでの誘殺虫数（10/17～23の7日間）（±）

大刀洗町 33頭（過去5か年平均 48.2頭、前年 7頭）

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年より多い（±）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 中齢以降の幼虫は未熟果や結球部位に食入するため、防除効果が著しく低下するので孵化直後の幼虫をねらって防除を行う。
- イ 施設栽培では、成虫の飛び込み防止のため4mm目以下の防虫ネットを隙間なく張る。
- ウ 薬剤感受性低下を避けるため、同一系統薬剤の連続散布を控え、異なる系統の薬剤をローテーション散布する。



8 ミナミキイロアザミウマ (野菜共通)

(1) 予報の内容

発生量： 平年よりやや多、前年並

(2) 予報の根拠

ア 10月5半旬調査結果(±)

ナス寄生葉率17.6%(平年16.3%、前年 27.7%)

発生ほ場率77.8%(平年72.3%、前年 100%)

ナス被害果率 2.3%(平年 2.0%、前年 2.6%)

発生ほ場率62.5%(平年35.8%、前年 66.7%)

イ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年より多い(±)。

(3) 防除上の注意

ア 卵は葉の内部に産み込まれ、成幼虫は葉裏、一部はガクの下で生息、蛹は土中で蛹化しているため、発生後は防除が困難である。早期発見に努め、早期防除を徹底する。

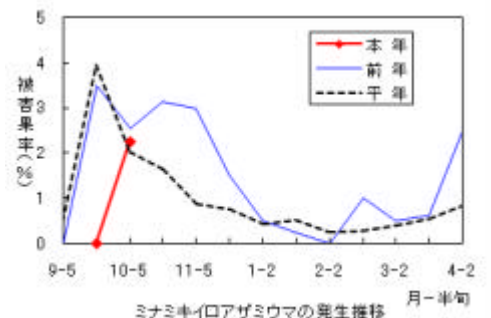
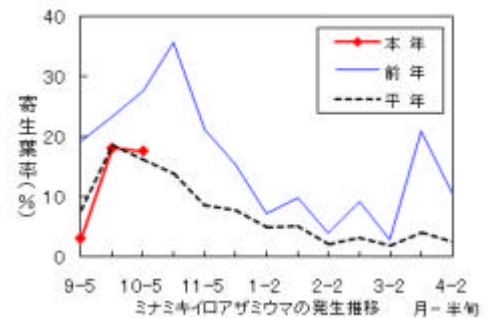
イ 初発生は、葉脈沿いに現れる食害症状を確認して

判断する。葉表では長さ2～3mmの細い白斑が葉脈に沿って連続して生じる。また、葉裏では3～5mmの大きさの銀白色に光る部分が葉脈沿いのところどころに生じる。

ウ 葉表より葉裏への寄生が多いので、薬剤散布は散布むらがないように丁寧に散布する。また、薬剤の到達しない葉内の卵から幼虫が、土中の蛹から成虫が徐々に発生してくるので、それらの虫を対象に5～10日後にもう一度薬剤散布を行う。

エ ほ場内外の雑草を徹底して除去し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

オ 本種はキュウリの黄化えそ病(MYSV)の媒介虫である。このウイルスはアザミウマ類が低密度でも伝染し、蔓延する恐れがある。キュウリでは、ハウスサイドや天窓等、施設開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置し、本種の侵入を抑制する。また、紫外線カットフィルムの使用も本種の発生を抑制する。



9 コナジラミ類（野菜共通）

(1) 予報の内容

発生量：平年・前年よりやや多

(2) 予報の根拠

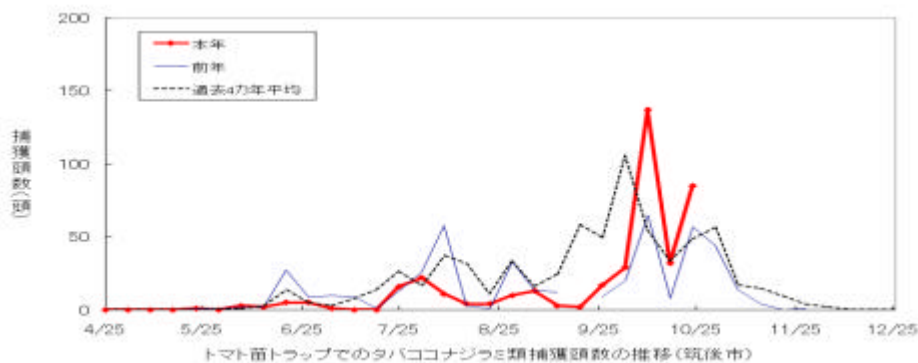
ア 10月5半旬調査結果（-）

ナス寄生葉率 18.2%（平年 34.1%、前年 24.1%）

イ トマト苗トラップでの捕獲誘殺数（10/18～24の7日間）（農業総合試験場調べ）（+）

筑後市 85頭（過去4か年平均 48.5頭、前年 57頭）

ウ 向こう1か月の気象予報は、気温は平年より高く、降水量は平年より多い（±）。



(3) 防除上の注意

ア ほ場内外の雑草の除去を徹底し、害虫の生息、増殖源を絶つ。

イ 幼虫や蛹が寄生している下位葉を除去し、施設内の密度を下げる。

ウ 葉裏や下位葉にも薬液が十分にかかるように散布する。

エ 例年、11月中は野外での発生がみられるので、ハウス内への飛び込みに注意し、防除を徹底する。

オ タバココナジラミ類はトマト黄化葉巻病(TYLCV)の媒介虫である。ハウスサイドや天窓等、施設開口部に0.4mm目合いの防虫ネットを設置し、媒介虫の侵入を防ぐ。

【野菜：その他の病害虫】

作物名 病害虫名	発生量 (現況)	発生量 (予想)		防除上注意すべき事項等
	平年比	平年比	前年比	
ネギ ヨドイシヨリ	並	並	並	
ナス うどんこ病 灰色かび病	並並	並並	並並	
トマト 葉かび病	並	並	並	病勢が進展してからの防除は困難となるので、発病前または発病初期のうちの防除を徹底する。
キャベツ 黒腐病 菌核病 コナガ アブラムシ類	やや少 並 やや少 並	並並 やや少 並	並並 やや少 やや少	
レタス 灰色かび病 菌核病 腐敗病	並並並	並並並	並並並	発病株はほ場に放置せず、ほ場外に持ち出し処分する。

農薬の適正使用、飛散防止対策の徹底を！

全ての農薬の残留基準が作物毎に設定され基準値を超えた食品（農産物）は販売が禁止されます。

農薬の使用に当たっては、ラベルを良く確認し農薬の使用基準を厳守するとともに周辺に飛散（ドリフト）しないよう、これまで以上に注意を払って下さい。

1 農薬適正使用の徹底

適用作物、使用量、濃度、使用時期、使用回数のなどラベルを良く確認し使用基準を遵守する。

動力噴霧器、薬液タンクなどの散布器具を十分に洗浄する。

他作物が隣接している場合は、なるべく双方に登録がある農薬を使用する。

2 飛散防止対策の徹底

風、散布方向、散布時間、散布圧などに留意する。

飛散しにくい農薬（剤型）や飛散が少ないドリフトレスノズルを使用する。

散布ほ場周辺の収穫前の作物には十分注意する。

3 防除履歴の記帳

薬剤散布が終わったら、作物名、ほ場の場所、散布月日、薬剤名、使用濃度、散布量等を正確に記帳する。

病虫害防除所では、病虫害の発生状況と防除についてホームページでお知らせしています。

ホームページ <http://www.jpnn.ne.jp/fukuoka>
電子メール kfok0301@sp.jpnn.ne.jp